

# 《研究ノート》

## カミュの『ペスト』について

五十野 昭夫

一九四一年頃から一九四七年頃までのあいだに執筆された(註1)と考えられている小説『ペスト』について、カミュ自身『異邦人』と比較しながら次のように述べている。『異邦人』は不条理に直面した裸の人間を描いている。『ペスト』は同じ不条理に直面した個人的観点の深淵な等価性を描いている。「…」そのうえ『ペスト』が証明しているように、不条理とは人なほひとつ教えない(註2)。このように仮空の都市に幽閉され悪疫のペストと闘うタルーやリユーの姿は、アラブ人を殺害しながら罪の意識を完全に欠落しいわば不条理にみちたあの裸形のムルソーとは決定的に異なり、別離と追放のさなかにおける人間連帯の深淵な等価性を獲得したと言われているのである。もちろんこうした『異邦人』か

ら『ペスト』への変化・展開が、第二次世界大戦におけるカミュのレジスタンス参加という極限的政治状況と微妙に絡み合っていることは確かであるにしても、このささやかな研究ノートでは、主としてプレイヤード版のロジェ・キーヨによる『ペスト』草稿原稿の研究を紹介しながらこの変化・展開に若干の考察を試みることにする。

すでに知られているように『カルネー』(一九三八年十二月)に書かれたジャンヌをめぐる不幸な結婚の断章は、一九四三年一月草稿原稿の中ヘステファンによってほぼ同じような内容で語りつがれる(註3)。さらにキーヨはこの一九四三年一月原稿の内容を次のようにも説明している。「この原稿で事件の開始する場所はオランと明記されず(Oという頭文字だけで記入され)、『…』ねずみが死んでミシェル門番も未知

の病にかかると」(註4)。「さらにこの町の様子は決定稿で消えた人物——「さきほど述べた」ステファンによって説明されるが、このステファンもまた新たに出現する老吏グランと同様、「…」妻ジャンヌによって見捨てられているのである。「…」そのうえステファンの日記は彼のその後の自殺を予告する」(註5)。そしてキーヨはこの一九四三年原稿の特徴を、一九四七年の決定稿と比較検討しながら次のようにも述べるのだ。「小説を五部に区分けしていた様子もない。ペストの拡大も衰退と同様オーケストラのようにそれほど巧みに広々と奏でられてはいない。「…」リユーのノート、タルーのカルネ、ステファンの日記が作者にほかならない語り手によって並列的にしかもかなり単調な方法で相互に結合されているのである」(註6)。

ところでプレイヤード版では、一九四三年原稿から一九四七年完成稿への具体的改稿方針の一つとして、次のようなことが挙げられている。「△別離の人々▽に係わる二つの章を書くこと」(註7)。さらにキーマは、完成稿に出現するこうした△別離の人々▽に関する人間模様について、カミューの方針を要約しながら次のようにも述べるのだ。「一九四三年原稿のステファンは発展を欠いてはいるが一九四五年まで生きのびる。[...]しかし彼に代わってより多く出現してくる新たな登場人物は、ベストの町から脱出しようと全力を傾けるがそうすることもできない△別離の人▽△追放された人▽である」(註8)。「こうした名前も表情もない登場人物の背後に[...]あの未来のランベールのような△別離の人々▽がどっと入りこむのだ。子供が両親と離れ離れになり、恋人同志が別れ別れになったさいの不安を書き記すこと。[...]すべての人々がおのれの孤独と差し向かいになる。[...]このように別離のテーマをこの小説の主要なテーマにすること」(註9)。

しかしながらこうした別離の人々のあいだにありながらキーマによれば、「このベストの中心的人物である」語り手は、不思議にも万人の気持ちに立ち返り、「[...]個人と集団、我と我々とのあいだの連帯の絆を孤独のただなかにおいて示すのである」(註10)。かくして『ベスト』の登場人物の様々な姿は、あの虚無にいろどられ超越をめざす不条理のムルソーとは決定的に相異し、ベストのために外部と完全に遮断されて生まれたこの別離の感情に惨苦しながら、個人と集団、我と我々とのあいだの連帯の絆を浮かび上がらせるのである。こうした相異・転回はベストの町から脱出して恋人に会うことだけを望んでいた新聞記者ランベールの、次のような一九四三年原稿から一九四七年決定稿への質的転換によって窺い知ることができる。一九四三年原稿では「ランベールはしばらくのあいだ沈黙していた。[...]リュートとタルがランベールにたいしてほんとうに賛成できる場合は、ランベールがこの不幸なすべての人から逃れることを拒否するときだけだった」(註11)。しかし一九四七年の完成稿では「僕(＝ランベール)はこれまでず

っと自分はこの町には無縁な人間だ[...]」と書いてしまった。ところがげんに見たものを忘れてしまった今では、もう確かに僕はこの町の人間です。[...]この事件は我々すべてに関係のあることなんです」(註12)。

オランの町の極限的隔絶化のただなかでこの別離の人ランベールの転回に象徴されるベストと闘う相対的人物の出現は、ポール・ガイアールが述べている問題「十八世紀や十九世紀の科学がもたらした過信を否定することによってたえず想起されることは、我々の認識それゆえ我々の力も相対的秩序に属するということなのだ。つまり人間には絶対は存在しないのである」(註13)という課題へと展開してゆくとであろう。

(註1) Albert Camus, Théâtre, récits, nouvelles 《Bibliothèque de la Pléiade》, Paris, Gallimard, 1967. 以下Camus: T. 1 略記)cf., p.1935 (註2) Albert Camus Carnets II, Paris, Gallimard, 1964, p.36 (註3) Camus: T. p.1945-46 (註4) ib., 1938 (註5) ib., 1938 (註6) ib., 1939 (註7) ib., 1941 (註8) ib., 1940 (註9) ib., 1941 (註10) ib., 1940 (註11) ib., 1995 (註12) ib., 1389 (註13) Pol Galliard; La Peste, Camus 《Profil d'une Oeuvre, 22》 Paris, Hatier, 1972, p.24